

二〇二一年度

一般入試② 問題（国語）

注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二三ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

運動のまったくできない兩宮大地(俺)は、自分がマネージャーを務める野球部が甲子園に出場し、そこで目にしたグラウンドキーパーにあらがれてグラウンド整備会社に就職した。一方、同じ野球部のエースピッチャーだった一志は、卒業後も関西の大学で野球をつづけていたが、ある誤解がもとでほかの部員に無視されるようになり、野球をやめて東京に帰る決心をする。二人は送別会をするようになったが、そこへ大地の職場の先輩長谷騎士が真夏とともに現れ、一志をキャッチボールに誘う。長谷は、一昨年夏の甲子園優勝投手だったが、肘を壊してプロを断念し、整備会社に入社していた……。

激しい捕球音が周囲のフェンスに反響する。

おそろおそろ一志を見た。

胸の前に構えたグローブのなかに、白球がおさまっていた。一志の、ど真ん中だ。

一志は痛そうに顔をしかめていた。一月の外気で手がかじかんでいるところに、あの球威だ。しかも、アツいミットではなく、ふつうのグローブだから、ものすごい衝撃が走ったのだろう。

あわてて一志に駆けよった。

「マジで……、大丈夫？」一志の様子しだいでは、すぐにやめさせるつもりだった。母校のセンバツ出場のニュースですら、拒否反応を示したのだ。

けれど、一志は笑った。わざとらしいつくり笑いではない。ひさしぶりに、歯を見せて、大きく笑ったのだ。

「いや、いい。こんな痺れる感触、ずっと味わってなかったよ。目が覚めた」

長谷さんに球を投げ返した一志が叫んだ。

「長谷さん！ 投げて大丈夫なんですか？」

俺はハッとした。

すっかり忘れていたけれど、長谷さんの肘は故障したままだと思っていた。ところが、長谷さんも一志と同様に、小学生

のような笑みを浮かべて答えた。

「肘の再建手術したんや。一カ月半くらい前」

俺は「ええ！」と、大声をあげてしまった。まったく気がつかなかったのは、季節が冬で長谷さんがずっと長袖を着ていたからかもしれない。着替えのときも、わざわざ長谷さんの裸なんか見たいと思わないし……。

けれど、手術をしたということは、その肘に痛々しい痕があるはずだ。

「遊離した軟骨をジョッキョキョした。俺を苦しめてたもんは、もうない。俺は自由や」長谷さんは、キャップのつばに手をかけ、少し恥ずかしそうに目深にかぶり直した。

その言葉に、何を感じたのか、一志が天をあおぐ。

「まだ万全やないけどな。ちょっとずつ、こうして投げられるようになってきたわ」

もしかして、甲子園ボウルのときに休みがちだったのは、手術やりハビリをしていたからだろうか。時期的には、ちょうど合致する。俺は真夏さんを見た。

真夏さんは、手術の件を知っていたらしく、にやりと微笑んでうなずいた。

長谷さんが、ふたたび振りかぶる。ゆっくりと左腿を上げ、大きく両腕を開いた。全身が弓のように緊張して張りつめたその刹那、ためこんだ力を一気に解放した。

来る！

一志がグローブに右手をそえて、身構えた。

糸を引くように、ボールが俺の目の前を横切る。

ズドンと、サンドバッグを殴ったような鈍い音がした。一志がやはり、痛みをこらえるように、唇を引き結んでいる。しかし、長谷さんは首を軽くひねった。

「まあ、まだ四割ってところやな」

「これで……、四割？」啞然とした。化け物だ。

一志の絶好調時のピッチングだって、威力がないわけじゃない。けれど、長谷さんの球はまるでバズーカだ。

一志が、「ははっ」と、笑う。ただただ、圧倒的な力を見せつけられて、自然と心の奥底から感嘆がもれたようだった。俺の横に、真夏さんが立った。

「いちおう、一志君と最後になるかもしれないし、ナイトにも今日の送別会のことつたえたんやけど……」コート上のポケットに両手をつっこんだ真夏さんは、軽く背伸びをしたり、踵を下ろしたり、寒そうに体を上下させていた。背負っているギターのケースも、その動きにあわせて揺れる。

「ここから先は、まるっきりナイトの言葉やで。ウチが言うたんやないで」と、前置きをして、真夏さんが語りはじめた。

3 雨宮のため息がうるさくてしかたがない。一志の心も、グラウンドの土と同じように、目に見えて掘り返せたらいいのに……。そう言っつて、仕事にも集中せえへん。ウザくて、ホンマにかなわん。

「アホか。俺ら、カウンセラーでも精神科医でもないんや。心が見えないのは当たり前やろつて、ナイトがもう朝っばらからうるさいねん」

長谷さんの口調を真似ているらしく、低い声で真夏さんがつぶけた。

4 「俺たちは、カウンセラーやない。グラウンドキーパーなんや。土やろうが、心やろうが、思いっきり掘り起こしてしまえばええんや。それが、グラウンドキーパーの流儀や。心に傷がついたんなら、天と地を丸ごとひっくり返して、転圧して固めてしまえばええんやつて。なんで、親友の雨宮がそれをできんねん、何をためらってるんやつて。真夏、今日、乗りこむぞつて、まるでケンカしに行くみたいと言っつて」

5 俺も、一志のように「ははっ」と、なかばあきれて笑った。そんなパワープレーが許されるのは、長谷さんだけだ。

(中略)

「でも、ナイトはぶつきらぼうで乱暴に見えて、やさしいねん。むかしっからそうやった」

「ですな」

「このまま、野球をあきらめかねない一志君を放っておけなかったんやろ。それに心を痛めてる大地君を見かねたんやろな」

長谷さん自身が、翼をもがれるような挫折を味わった。自由に飛べなくなった。だからこそ、同じく墜落寸前だった一

志の苦境に黙っていられたのだから。

(中略)

もう、真夏さんと長谷さんの深い絆に、嫉妬心はわかかった。ここまでしてくれた長谷さんも、どうか幸せになってほしい。でっかい空に、でっかい体で、ふたたび飛び立ってほしい。

「嫉妬か……」部屋着のままあわてて出てきたせいで、しだいに体の芯から冷えてきた。腕を組むような格好で、両手を両脇の下にはさみこんで震えていた。

どちらかという、俺は一志と長谷さんの二人のほうに、強い嫉妬を感じているようだった。

たいして仲良くもなかったのに、こうしてボールをやりとりするだけで、男同士、もうわかりあえてしまう。あれだけ覇気の失われていた一志の目に——表情に生気が戻っていた。

俺が何年もかかってキズき上げた一志との関係を、野球をする者同士なら、一瞬で飛び越えることができてしまう。互いの力量を認めあい、尊重しあうことができる。

6 「ピッチャーの気持ちは、ピッチャーにしかわからへん」長谷さんが、ボールを投げながら言った。

一志が受ける。無言で投げ返す。

「ピッチャーが投げなかったら、試合ははじまらへん。すべては、お前が投げるところから、はじまる。お前が起点やしだいに、あたりが薄暗くなってきた。でも、二人はやめない。

「キャッチャーが、なんぼのもんじや。俺らピッチャーが主役や。花形や。お前らは、黙って俺らの球を受けとけ——そういう気概でいかな、簡単に打たれるで」

グローブと硬球がぶつかる音が、絶え間なく、リズムミカルに響く。

「一度折れたら、簡単には戻ってこれへんぞ。だから、踏みとどまれ。最初は、ネットにでも、壁にでも、投げこんだらええ。ひたすら投げこめ。クソみたいなバカは相手にするな」

7 球の重み以上に、長谷さんの投げかける言葉には、鋼鉄みたいな強度があった。まともなぶつかったら、怪我をしかねない重さだ。

それでも、一志は真正面から、その言葉を受けとめる。

「あいつの球を、受けてみたい。とてつもないボールや。そうキャッチャーに思わせたら、勝ちや。あいつの球を打つてみたいって、バッターに思わせたら勝ちや。絶対にお前の味方になってくれるキャッチャー、チームメートが出てくる。お前の努力を認めるヤツは必ずおる」

長谷さんがつぶけた。

「それでも、あかんかったら、そんな腐った部はやめろ。独立リーグでも、なんでも行ったらええ」

俺は唇を噛みしめた。

ピッチャーの気持ちはピッチャーにしかわからない。

プレーヤーの気持ちはプレーヤーにしかわからない。

たしかに、かつて島さんが言ってくれたとおり、選手の気持ちを想像してみることはできる。けれど、その想像にだって、限界はあるんだ。

どう頑張ったって、野球を介した傑と父さんの仲に割って入ることはできない。一志と長谷さんのように、ボールを交わしただけで、一足飛びに体の底から魂の部分でぶつかりあえる——そんな男同士の友情をはぐくむことは、到底俺にはできない。

俺は傑が生まれたときから、ずっと嫉妬していたんだと、否応なく気づかされる。

父さんと傑のキャッチボールを、うらやましく眺めていた。雨の日、バッティングセンターで傑を褒める父さんを、俺のほうにも振り向かせたくてしかたがなかった。

傑に——父さんに大事にされる傑に——どうしようもなく嫉妬していた。

兄として、弟をかわいがっているふりをして、その感情に目をつむっていた。お年玉をあげるような、頼りがいのある兄を演じていた。けれど、違った。俺も目が覚めた。

傑がねたましい。

どうしようもなく、くるおしいほど、うらやましい。なんであいつには、生まれた瞬間からすべてが与えられているん

だ？　なんで、俺にはなんにもないんだ？

真夏さんへの恋愛感情がかわいく思えてしまうほど、その嫉妬の炎は小さいころから俺の内側ですっと燃え上がっていた。それに見て見ぬふりをしてきた。

俺の心のなかの水分は、その炎ですっかりジヨウハツし、土壌は干からび、ひびわれ、まるで水分をとおさなくなっていた。雨はしみこまず、あふれだし、オーバーフローした。

今さら、気がついた。俺の心のなかにこそ、不透水層は広がっていたのだ。そのことに、ずっと目をそむけつづけてきた。

一志と長谷さんのキャッチボールを目の当りにして、その深い傷がむき出しにされ、あばかれた。

本当は野球なんか憎くてしかたがないのに、その憎しみや嫉妬のどろどろした感情を認めたくなくて——父さんにどうしても俺の姿を見てほしくて、俺は徳志館高校のマネージャーになった。

そして、甲子園のグラウンドキーパーになった。

本当は、感謝なんか、求めているなかった。ただただ、振り向いてほしかっただけだ。家族の一員になりたかっただけだ。心の土を耕し、掘り起こし、締め固めなければならなかったのは、本当は俺のほうだったのだ……。

「あっ！」と、一志の声が響いて、我に返った。

球を捕りそこねたらしい。一志の前に、ボールが転がっていく。

「もう、見えへんな。やめよう」長谷さんも一志に歩みよっていった。

ボールを拾った一志が、長谷さんを見上げる。

その瞬間だった。一志が顔をしかめる。夕陽を背にした長谷さんを、まぶしそうに見上げている。

しかし、どうも様子が変だった。

「もしかして……、いや……、間違ってたなら、ごめんなさい」

一志が何度も前置きをして言葉をつづけた。

「一昨年の夏の甲子園でした。僕が——徳志館が一回戦で負けたあと、土を拾おうとして、でも、なかなか集められなくて

……」

その先を聞きたいような、聞きたくないような、そんなフクザツな感情が、俺のなかでせめぎあっていた。
「そのとき、トンボで土を運んできてくれたグラウンドキーパーがいました。この前、大地が話したとおり」
俺はぎゅつと目をつむった。

「それって、長谷さんですよね？」

長谷さんは、拾い上げたりユックサックにグローブをしまいながら、無表情で答えた。

「アホか。俺、ちやうわ」

「僕は、あのときも、土を持ってきてくれたグラウンドキーパーをこうして見上げていたんです。グラウンドにしゃがみ込んだ格好で、逆光で、まぶしくて、顔は全然見えなくて、相手は帽子をかぶってて……」

一志はすがりつくような視線を長谷さんに向けた。

「そして、今も、僕はあなたを見上げています。夕陽を背負った長谷さんを見上げています。ぴたりと重なるんです、イメージが。あのときの、シルエットが」

長谷さんは、依然として無表情で一志を見下ろしている。

「長谷さんなんですよね？ そうなんですよね？」

「だったら、なんや？」

⁹ 乱暴な口調とは裏腹に、その声は湿り気を帯びて、震えていた。

「俺やったら、なんやっていうんや？」

「ありがとうございます」立ち上がった一志が、ゆっくりと頭を下げた。「二度も助けてくれました。あのときは、絶対にプロになって、甲子園に帰ってきたいと思いました。もちろん、今も……」

「邪魔やっただけや。整備の邪魔やったんや」

「ナイト……」と、両手を口にあてた真夏さんがつぶやいた。

「ただ、それだけや」

「それでも……、いろいろなことをあきらめなくてよかったと、心の底から思います。東京に帰るのは、やめます。両親は

関係ない。ほかの部員も関係ない。俺はピッチャーだ。ピッチャーが投げなきゃはじまらない。俺は……、俺は、もつとわがままに振る舞ってもいいんだ」

一志の目が光っていた。

「なんとしてもここに踏みとどまります。ありがとうございます」

¹⁰ 俺は寒さに震えていた。自分の心のなかをのぞきみる余裕もなかった。

嫉妬なんか、いらぬ。感謝を求めるのではない。

そんな足手まといの、負の感情はいい加減、脱ぎ捨てたい。俺も自由になりたい。独力で高く飛び立ちたい。

純粹に、土と、芝と向きあいたかった。一人前のグラウンドキーパーになりたかった。プロのグラウンドキーパーになりたかった。

長谷さんが、無言で寮へと引きあげていく。その背中に、あわてて呼びかけた。

「長谷さん！」

「何や……？」

長谷さんが振り返った。

「僕もプロになりたいんです！」

必死で訴えた。

「プロ野球選手みたいに、お医者さんや看護師さんみたいに、ビルや家を建てる人みたいに、電車やバスやトラックを運転する人みたいに、僕もグラウンドキーパーのプロになりたいです」

長谷さんは、あきれかえったと言わんばかりに、宙を見上げた。

「ピッチャーの気持ちは、ピッチャーにしかわからへん」

空気が乾燥しているのか、上下の唇を一度湿らせて長谷さんがつづけた。

「同じように、グラウンドキーパーの気持ちは、仕事の醍醐味も、グラウンドキーパーにしかわからへん」

長谷さんは言った。

「選手的笑顔によりそうんや」

長谷さんは、俺にもボールを投げかけようとしている。

「選手の涙によりそうんや」

俺はそのボールをそらすまいと、長谷さんの目を真つ直ぐ見すえた。

「冷静に周囲を見渡せ。風や雨や太陽を日々、感じるんや。土や芝によりそうんや。それが、グラウンドキーパーの醍醐味や。ほかの仕事にはない、やりがいや。もうすぐ一年なんやから、雨宮にはわかると思ってたんやけどな」

荒々しく突き放すような口調のわりに、長谷さんはどこかさみしげでもあった。何か大事なものを手渡され、託されたように感じた俺は、相手の目を見つめたまま大きくうなずいた。

（朝倉宏景『あめつちのうた』）

⑩ 甲子園ボール：全日本大学アメリカンフットボール選手権大会の決勝戦。

オーバーフロー：容器などから液体があふれ出ること。

トンボ：地ならしをするT字型の道具。

問一 〰〰線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1 「目が覚めた」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野球をやめると決めていたが、長谷の投げる圧倒的な球に挑発され、同じピッチャーとして長谷には絶対に負けられないと闘志に火がついたということ。

イ 長谷の投げる勢いのある球を受けたことで、これまで気づかないふりをしてきた長谷と自分のピッチャーとしての能力の差を強く思い知ったということ。

ウ 長谷が投げる勢いのある球を受けたことで、思うように野球ができない中で失いかけていた、野球をする喜びそのものをひさびさに実感したということ。

エ 球威のある球を受けたことで長谷の回復ぶりを直に感じ、ピッチャーとして再起を目指す自分にとって、大きな希望を手にしたように思えたということ。

問三 ——線部 2 「少し恥ずかしそうに目深にかぶり直した」とあるが、長谷はなぜ「恥ずかしそう」なのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手術をして肘が治ったことの喜びで、怪我に苦しんでいたことを思わず言っしまい、自分の弱さを見せてしまったという思いがわいたから。

イ 自分の肘が手術で治り、また投げられることを喜んでいるのだが、その喜びを柄にもなく表に出し、大げさな言葉で言ってしまったと思ったから。

ウ 肘の手術によりまた投げられるようになってうれしいが、球威がまだ戻っていない自覚があり、大したことないなあなどられた気がしたから。

エ 肘の手術がうまくいき、また投げられることがうれしくて、実際の回復度合に合わない、あまりに楽観的な言葉を使ってしまったと感じたから。

問四 —— 線部 3 「兩宮のため息がうるさくてしかたがない（ウザくて、ホンマにかなわん）」とあるが、長谷はどういう気持ちでこう言っているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 兩宮が、一志のために何かしてやりたいと思いがちながらも行動に移せず、うじうじと悩んでばかりいて煮え切らない態度であるのにいらだちを覚え、情けないやつだと思っている。

イ 兩宮が、一志のためにどうしたらよいかを考えあぐね、関係ない自分のことを頼って泣きついてくるのがうっとうしくてしかたないので自分が何とかしてやるしかないと思っている。

ウ 兩宮が、一志のことを心から心配するあまりにため息ばかりついて仕事に集中できないでいることを、グラウンドキーパーとしてのプロ意識に欠けるだめなやつだと思っている。

エ 兩宮が、一志のことを心配してその傷ついた心をどうしたら癒やせるのかと、ただ思案にくれて悩んでいるだけなのをはがゆく思いながら、どうにかしてやりたいと思っている。

問五 —— 線部 4 「俺たちは、カウンセラーやない。グラウンドキーパーなんや」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親友ならカウンセラーや精神科医のように人の心を探るのではなく、グラウンドの土と闘うようにケンカするぐらいのつもりで真正面から対決すべきだということ。

イ カウンセラーや精神科医とは違って、自分たちには人の心など見えるはずもないのだから、グラウンドキーパーとして土と向き合うことに専念すべきだということ。

ウ 自分たちにはカウンセラーのように人の心の中は見えなくて当然なので、相手の心の傷にふれることを恐れずに自分が言うべきだと思うことを言うしかないということ。

エ 土の中も心の中も目に見えないことでは同じなのだから、グラウンドの土を掘り起こすように、しっかりと相手の心深くまで届く言葉をかけるしかないということ。

問六 —— 線部 5 「俺も、一志のように『ははっ』と、なかばあきれて笑った」とあるが、このときの兩宮の気持ちとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 長谷らしい強引さにおどろかされながらも、自分がしたくてもできないことをたやすく長谷が実行していることに対してとてもかなわないと思っている。

イ 一志を放っておけないと気づかってくれるやさしさがありながら、その思いをぶっきらぼうで乱暴にしか表現できない長谷の不器用さを残念に思っている。

ウ 長谷に指摘されたとおり、一志の親友としてふがいなさは感じているが、ピッチャーではない自分に長谷と同じことができるわけがないと開き直っている。

エ 長谷の強引なやり方は一歩間違えれば逆に一志を深く傷つけてしまうことになりかねないので、今の所たまたまうまくいっていることにほっとしている。

問七 —— 線部 6 「ピッチャーの気持ちは、ピッチャーにしかわからへん」とあるが、ここで長谷は一志にどのようなことを伝えようとしているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 長谷自身のように、自分の力を認めさせることがすべてと考えて周囲に働きかけつづけ、いきなりは無理でも味方を少しずつ増やしていくべきだということ。

イ 長谷自身がそうであったように、周囲の反応やふるまいを気にせず自分が中心なんだという強い思いで、ひたすら努力をつづけていけばよいということ。

ウ 自分の努力が認められえないなら、それは理解のない周囲が悪いのだから、長谷自身がそうしたように、きつぱりとあきらめてしまえばよいということ。

エ 自分が起点になってすべてははじまるのだから、長谷自身と同じく、とにかく実力で黙らせ、理解者がいなくても問題のない状況を作るべきだということ。

問八 —— 線部7「球の重み以上に、長谷さんの投げかける言葉には、鋼鉄みたいな強度があった。まともにぶつかったら、怪我をしかねない重さだ」とあるが、兩宮が長谷の言葉をそのように思ったのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 心を傷つけられて野球をあきらめかけていた一志の心をふたたびふるい立たせるだけの強い情熱が感じられるが、その迷いのない激しさが一志をいっそう追いつめてしまう危うさも同時に感じられるから。

イ 同じピッチャーの自分だからこそ一志が立ち直るために必要なことを伝えられるはずだという強い自信が感じられるが、一志の気持ちをまったく考えようとしていない危うさも同時に感じられるから。

ウ 自分と同じピッチャーである一志ならば、立ち直るために今すべきことを必ずわかってくれるはずだという強い期待が感じられるが、それが一志の重荷となってしまいう危うさも同時に感じられるから。

エ ピッチャーにしかわからない気持ちを思い出しさえすれば、必ず一志は立ち直れるという主張に強い信念が感じられるが、その断定のしかたが一志の反感を買ってしまう危うさも同時に感じられるから。

問九 —— 線部8「俺も目が覚めた」とあるが、ここでいう「目が覚めた」とは、兩宮のどのような心の動きを言い表したのか。何がきっかけとなって「目が覚めた」のかがわかるように、八〇字以上、一〇〇字以内で説明しなさい。

問十 —— 線部9「乱暴な口調とは裏腹に、その声は湿り気を帯びて、震えていた」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一志に甲子園の土を運んだのは自分に間違いなく、強い言葉で突き放して話をうやむやにしようとしながらも、あの時かえって一志に悪いことをしてしまったのではないかと、急に不安にとらわれたから。

イ 一志に甲子園の土を運んだグラウンドキーパーは自分であったと見やぶられたことにおどろき、それでもとっさにごまかそうとしたものの、どうにもごまかしきれなくなって、うろたえてしまっているから。

ウ 一志に甲子園の土を運んだのはたしかに自分であり、そのことを言い当てられた動揺を押し殺して開き直ってみせたものの、同じピッチャーとしてあの時の一志に感じた強い共感が急によみがえってきたから。

エ 一志に甲子園の土を運んだのが自分であったと気づかれ、そっけなく話をそらそうとしながらも、自分のひそかな気づかいを一志が忘れたがたいこととして覚えているらしいことに、心をゆさぶられたから。

問十一 —— 線部10「自分の心のなかをのぞきみる余裕もなかった」とあるが、このときの兩宮の気持ちとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 再起を決意した一志の力強い言葉に心をゆさぶられ、これからプロのグラウンドキーパーとして生きていきたいという思いがあふれだし、その思いにせき立てられている。

イ 再起に向けて動き出す一志に取り残されてしまったような気がして、今のままでは一人前のグラウンドキーパーになどなれないと、重圧に押しつぶされそうになっている。

ウ 再起を決意した一志と同じように、自分にも気持ちをふるい立たせる言葉を投げかけてほしいと思っていることを長谷に何とか気づいてもらおうと、必死になっている。

エ 再起を決意した一志の言葉に刺激を受け、これからは誰に遠慮することもなく、プロのグラウンドキーパーとして生きていくという覚悟を固め、気持ちを高ぶらせている。

問三 ――線部II「上下の唇を一度湿らせて」とあるが、「空気が乾燥している」以外に理由があるとすれば、長谷はなぜそのような動作をしたのだと考えられるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雨宮がグラウンドキーパーとしての覚悟をはっきりと口にしたことで、自分の後を継ごうとする人間が現れたと喜びながらも、一方でその厳しさと難しさを今伝えておかなければならないと考え、気合をこめたから。

イ 雨宮がグラウンドキーパーとしての大事な部分をいまだにわかっていないことを知り、後を託す存在として言葉にせずともそれを伝えてきたつもりだっただけに悔しさがこみあげ、その思いをぶつけようとしたから。

ウ 雨宮がグラウンドキーパーへの強い思いをぶつけてきたことがわかり、あきれた様子をよそおいつつも、今後を任せられる存在と見こんで、雨宮に正面から向き合って自分の思いを伝えようと気を引き締めたから。

エ 雨宮が自分に対して初めて信頼を寄せてきたことで、ぶっきらぼうで乱暴な言い方をしつつも、これならグラウンドキーパーとして雨宮に後を任せられるという思いがわき上がってきて、満足感を噛みしめたから。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

1 近代の産業社会では「誰でも、何にでもなれる」という考えが、社会に広く共有されています。一見、これは個々人の「持ち味」を大切にしているように見えますが、2 実際には、まったく逆です。このことは、仕事のやり方を標準化するような考え方と、3 表裏一体のものになっているのです。

もちろん、「誰でも、何にでもなれる」というのは、実際には実現不可能な「幻想」4 でしかありません。にもかかわらず、それが多くの人の共通認識になっているのは、社会の多くの部分が「誰にでもできる」ことを前提に組み立てられているからでもあるのです。

3 いまの社会は、誰が何をしてもいい、つまり人間が区別なく同じになっている社会です。しかし、昔はそうではなかった。区別があつて、しかも全体として調和がとれた社会でした。

日本の場合、江戸時代の社会は、武士なら武士、農民なら農民、商人なら商人と、5 各々が果たすべき役割は明確化していました。もちろん、階級間の流動性がまったくなかったわけではなく、農民や商人の子が武士になるようなケースもずいぶんありましたが、社会の組み立てとしては明確に区分されていました。

また、大人の男性だけができる役割、大人の女性だけができる役割、6 高齢者だけができる役割、子供だけができる役割など、年齢や性別によって、人それぞれの役割があつて、それを組み合わせることで社会は動いていました。いまでも伝統的な祭礼などでは、そのような役割分担がきちんと残っています。

ところが産業革命が起こり、工場で物を大量に生産するあり方が経済を支配し、人間の生活を支配するようになります。そのときに問題になったのが、「工場に働きにくる人がいなければ、新しい産業はできない」ということでした。近代産業化する以前の社会では、やるべき仕事は全部決まっています、職業間の流動性は高くありませんでした。農家の子供は農家を継ぎ、職人の子供は職人を継ぎ、羊飼いの子供は羊飼いを継ぐのが当たり前前の社会です。しかし、その価値観のままでは、新しい工場をつくって新しい産業を立ち上げても、働く人のなり手がありません。

4 4 そこで、どうしたか。世の中の人々の「ものの考え方」を変えたのです。

近代の個人主義、自由と平等などという思想は、それで生まれてきた考え方でした。「平等」という思想の背景には、「誰でも工場で働けます」という考え方があった。「自由」の背景には、「あなたは羊飼いでなくて、他のものにもなっていない。何にでもなれます」という考え方があった。

「誰でも、何にでもなれる」ということは、別の言い方をすれば「職業の自由」ですが、これがないと近代産業社会が維持できません。いまも実際にそのような考え方を基盤として、産業社会は維持されているのです。

ところで、「誰でも、何にでもなれる」という思想は、一見、個人をとっても大切にしている、一人ひとりの自由と平等を保障しているように思えます。しかし、実際はどうでしょうか。実のところは、その人の個性をまったく重視していないのではないのでしょうか。

先ほど、近代社会は「多くの部分が『誰にでもできる』ことを前提に組み立てられている」と述べました。「誰にでもできる」ことが前提だということは、取り換えが可能だということです。ある人が辞めたら、別の人を入れればいい。ある会社を辞めても、別の会社で同じ仕事ができる。現実には社会で見られるのは、そういう意味での「自由平等」であって、一人ひとりの持ち味はほとんど関係ありません。

たしかに、学生が就職活動をするようなときには、「個性が必要」などといわれますし、「面接のときには自分を表現しなさい」などということもいわれるでしょう。また、現代のような情報化社会になれば、職種によっては「個性」が求められることもあるかもしれません。

しかし、多くの企業の現場では、会社が求めているのは結局、一定の計算能力や理解力、あるいは職場の仲間たちと力をあわせてやっていける協調性などといった能力です。端的に言って、個性はまったく重視されません。

近代の普通教育は、もともと産業労働者を育てるために作りあげられた教育ですから、一定の計算能力、一定の言語能力だけが育てばいい。全員が同じ計算能力を持ち、全員が同様な国語の理解力を持っていて、全員が同じような教養の基盤を持っていれば、大勢の社員を雇ったときに会社の仕事がうまく回る。だから、学生たちにそのような能力を身につけさせて卒業させるのが、近代の教育なのです。

近代教育の成果は、通知表やテストの偏差値などの数字で評価されます。しかし、考えてみればわかりますが、数字で個性を評価できるわけではありません。つまり、近代の教育では、個性はそもそも評価の対象になっていないということです。一方、近年の学校教育では「個性が抑圧された社会だった」と教えられがちな近代以前の社会には、むしろ逆に、『らしさ』を一〇〇%発揮するにはどうしたらいいか」というものの考え方がありました。

その考え方を象徴する概念こそ「道」なのです。武士道にかぎらず、昔は農民にせよ、商人にせよ、職人にせよ、皆、「らしさ」の世界のなかで生きていました。

武士は武士の道、農民は農民の道、商人は商人の道、職人は職人の道、というように、それぞれの仕事には、それぞれの「道」がありました。

さらに仕事だけではなく、男は男の道、女は女の道というふうには、なんでも「道」というものが生き方の基本的な形式になっていました。

ここで考えるべきは、「真実の生き方とは何か」ということです。誰であっても、「自分はどのように生きるべきか」と考えるとき、「一〇〇%真実の生き方を貫きたい」と思うのではないのでしょうか。でたらめな、嘘の生き方をしたいと思う人は、本来、稀であるはずですが。

では、「真実の生き方」とは何でしょうか。具体的に答えるのはとても難しいですが、しかし、式に表わすことは簡単できます。

ヨーロッパの哲学でいえば、絶対の真理というものは、「A=A」という形をしていなければならないことになります。

しかし、たとえば「これは紙コップだ」というとき、その命題は常に「A=A」にはなりません。なぜなら、「これ（紙コップ）」は、必ずしも「紙コップ」としてのみ認識されるわけではないからです。

何かを飲むとしている人からすると、目の前の「これ」は、まごうことなき「紙コップ」でしょう。しかし、キャンプ場などでゴミ拾いをしている人からすれば、「これはゴミだ」ということになるかもしれない。またあるいは、二つの紙コップの底に長い糸をつけ、その糸をピンと張って離れた相手と話したら、「これは糸電話だ」ともいえるでしょう。

必ず「A=A」になるとはかぎらないものは、真理とはいえません。だとすれば、「真実の生き方」とは、どのようなのだといえるのでしょうか。

おそらく、こうではないかと思えます。もし、「本当の自分は、こう生きるべきだ」という理想の姿があったとして、その「理想の自分」と「いま現にある自分」とがイコールになれば、真実の生き方が実現したことになるのではないかと。もちろん、一〇〇%「A=A」とまではいかないかもしれませんが。しかし、かなりイコールに近づけることはできるはず。」「自分らしさを一〇〇%に近く発揮できている理想の自分」と「いま生きている自分」とを、なるべくイコールであるようにすることができたとすれば、真実の生き方に限りなく近づくといえるだろうと思うのです。

実は、「理想の自分」と「いま生きている自分」をイコールにしようとする、そういう生き方を、昔の人は「道」と呼んでいたのです。

たとえば「武士道」とは、「自分=武士」であろうとする生き方のことです。「自分らしさは、武士であることによって発揮できるのだ」と思った人が、自分を武士とイコールにしようとした。⁹ そういう生き方のことを武士道というのです。

もちろん、繰り返して述べてきたように、「自分は立派な商人でありたい」と思い、自分と立派な商人とをイコールにするべく生きれば、それは商人道という道になります。

「理想の自分」と「いま生きている自分」とを「A=A」の関係に近づける。それこそ「道」の思想なのです。

（菅野覚明『本当の武士道』とは何か 日本人の理想と倫理^{りんり}）

問一 —— 線部1「近代の産業社会では『誰でも、何にでもなれる』という考えが、社会に広く共有されています」とあるが、「誰でも、何にでもなれる」という考えが、「近代の産業社会」で「広く共有」される必要があったのはなぜか。

「近代の産業社会」とはどのような社会であるのかを明らかにした上で、その理由を六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。ただし、次の言葉を必ず用いて答えること。

職業間の流動性

問二 —— 線部2「実際には、まったく逆です」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近代の産業社会では誰もが何にでもなれるというのは幻想にすぎず、実際には実現不可能な絵空事であるということ。
- イ 機械による仕事が標準的な近代の産業社会において人間の仕事は少なく、何にでもなれる自由などないということ。
- ウ 近代の産業社会に浸透^{しんとう}しているのは、仕事の標準化によって個性を大事にする考え方とは正反対の考えだということ。
- エ 誰が何をしてもいいとする近代の産業社会のあり方は、個性の違いに価値を置かず、むしろ軽ん^{かろ}じているということ。

問三 —— 線部3「区別があつて、しかも全体として調和がとれた社会」とあるが、それはどのような社会であつたか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 階級間の例外的な移動をのぞき、大多数の人が階級や性別、また年齢の固定された役割を、気は進まないながらも果たすことで安定していた社会。
- イ 階級や性別、また年齢による分け方がしっかり定まっており、その違いにしたがつて誰もが自分のやるべきことをこなし、うまく動いていた社会。
- ウ 階級や性別、また年齢に応じて役割の分担が無理のない形でなされており、祭礼などといった伝統を現在にいたるまで大事に受け継いできた社会。
- エ 階級や性別、また年齢による区別がしっかりと守られ、なおかつその区別さえ守れば誰もが好きなことをやる自由があり、バランスのとれていた社会。

問四 — 線部4「世の中の人々の『ものの考え方』を変えたのです」とあるが、どのように変えたのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昔ながらの仕事にこだわるよりも、自由な発想で新しい産業を立ち上げるほうがよいという考え方に変えた。
- イ 親と同じ仕事についたほうが安全でよいという考え方を、新たに工場で働くことを推奨する考え方に変えた。
- ウ 職業とは決められた家業を引き継ぐものではなく、誰もが自由に選ぶことのできるものだという考え方に変えた。
- エ 誰もが工場で働いていいという産業側の都合にそった考え方を、個人の自由平等を尊重する考え方に変えた。

問五 — 線部5「実のところは、その人の個性をまったく重視していない」とあるが、それはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「誰でも、何にでもなれる」とは言っても、結局は家系や年齢、性別によって役割はある程度固定化されており、その中で個性を生かして生きていくことは難しいから。
- イ 近代産業社会においては、どの職場でも一定の計算力や理解力などが求められ、自分の持ち味を発揮する以前にそれらの高いハードルを乗り越えなければならぬから。
- ウ 近代産業社会で求められるものは、仕事や製品の質の高さよりも、いかに効率よく利益を産み出すかであり、個性より力をあわせて一つの仕事をすることが重要だから。
- エ 「誰でも、何にでもなれる」ということは、ある人の仕事の代わりを別の人ができ、同じ仕事を別の所でもできることで、一人ひとりの持ち味は期待されていないから。

問六 — 線部6「近代の普通教育」とあるが、それはどのような教育であったか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 産業労働の現場で個性が十分発揮できるように、個々の能力を育てることを何よりも優先してきた教育。
- イ 企業が個人個人の能力の差を把握しやすいう、成果を数字で評価することに特に重きを置いてきた教育。
- ウ 企業の現場で働く際に土台となる一定の能力を、全員に等しく持たせることに特に力を注いできた教育。
- エ 個性を企業の現場が求める協調性を損なうものとしてとらえ、あえて評価の対象から外してきた教育。

問七 — 線部7「個性が抑圧された社会だった」と教えられがちな近代以前の社会」とあるが、「近代以前の社会」がそのように「教えられがち」だったのはなぜか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 近代以前の社会においては、「誰でも、何にでもなれる」というのは実現不可能な幻想でしかないと考えられており、近代社会のように個人主義、自由平等などという思想が人々の共通認識になっていなかったから。

イ 近代以前の社会は、生まれついた家、階級によって役割が固定化され、一人ひとりの自由平等が保障されない社会だとするほうが、「職業の自由」によって成り立っている近代社会の側から見ると都合がよかったから。

- ウ 近代以前の社会では、職業ごとにやるべき仕事が決まっていた、人々は職場のしきたりやマニュアルにしたがって仕事をしていくしかなく、仕事上で自分なりの工夫をする余地のない不自由な社会と思われたから。
- エ 近代以前の社会では、たとえば武士、農民、商人、職人といった職業や、年齢、性別などによってそれぞれの役割が明確化されていて、その組み合わせで社会が動いており、個性を生かすチャンスなどなかったから。

問八 —— 線部 8 『らしさ』の世界のなかで生きていました」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア それぞれの仕事に応じて、ふさわしいふるまいを追い求めて「らしさ」を貫いていくことで、自らの生を充実させられるのだと誰もが考えて生きていたということ。

イ それぞれの身分に応じて、定められた枠をはみ出さず目立たないようにして「らしさ」を守ることで、平穩に生きていけるのだと誰もが考えて生きていたということ。

ウ それぞれの階級に応じて、果たすべき役割を積極的に受け持つて「らしさ」を表し、その階級の一員として人に認めてもらおうと誰もが考えて生きていたということ。

エ それぞれの役割に応じて、他の人の助けになることを常に心がけて「らしさ」に徹し、周囲との調和のとれた関係性を誰もが第一に考えて生きていたということ。

問九 —— 線部 9 「そういう生き方のことを武士道というのです」とあるが、「武士道」とはどのような「生き方」か。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 武士の生き方こそが人間にとって真実の正しい生き方であると信じ、立派な武士としてのふるまいを、自分の人生で可能な限り貫こうと心がける生き方。

イ 自分に最も向いている生き方として武士を選び、立派な武士のふるまいをいま生きている自分の手本にすることで、できる限りそれに近づこうとする生き方。

ウ 自分が武士であることを誇りとしながら、いま生きている自分の個性を最大限に発揮して、理想的な新しい武士のあり方を追い求めていこうとする生き方。

エ 自らの武士という役割の中に自分のあるべき姿を見出し、理想の武士像にいまの自分を限りなく近づけることで、目指すべき自分になろうと努める生き方。

受験番号

--

氏名

--

	①
	②
	③
	④
	⑤

解答用紙2

--

合計

--

◆右のらんには何も書かないこと。

問		一	
d		a	
蒸発		厚	
e		b	
複雑		除去	
		c	
		築	

問二

ウ

問三

イ

問四

エ

問五

ウ

問六

ア

問七

イ

問八

ア

問九				
む	た	が	同	一
け	ど	、	士	志
続	う	野	の	と
け	し	球	友	長
て	よ	を	情	谷
き	う	介	を	さ
た	も	し	は	ん
こ	な	た	ぐ	が
と	い	父	く	ボ
に	ほ	さ	む	ー
気	ど	ん	様	ル
づ	の	と	子	を
か	嫉	係	を	交
さ	妬	の	目	わ
れ	心	仲	に	し
た	に	に	し	た
こ	、	感	て	だ
と	目	じ	、	け
。	を	て	自	で
100	80	そ	い	分
			男	

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問十
工

問十一
ア

問十二
ウ

問一			
工	場	で	物
を	大	量	生
産	す	る	近
代	の	産	あ
り	業	方	が
経	社	会	が
済	を	を	維
や	工	場	持
人	に	す	る
間	勤	る	間

問二
工

問三
イ

問四
ウ

問五
工

問六
ウ

問七
イ

問八
ア

問九
エ

80

80